発刊によせて

東日本国際大学・東洋思想研究所が発刊する本誌『研究　東洋』は、今号で第十号の節目を迎えた。

東洋思想の現代的意義を探求すべく研究所が設立されたのが二〇〇九年四月、翌年の二〇一〇年二月には研究紀要として『東洋思想』が発刊された。今、その頁をめくると、まず目につくのは韓国・成均館大学校の錚々たる教授陣や香港孔教学院の院長による専門的な儒学論である。一方で、東日本国際大学の執筆者のそれは、文化論的あるいは文明論的な趣きが強いものとなっている。当研究所は発足当初から、儒学研究をはじめとする専門研究を重視しつつ、しかも現代的な諸問題の解決に資する東洋の智慧の発掘を試みるところに特徴があった。

そして、二〇一一年二月、本学儒学文化研究所（現在は東洋思想研究所と合併）が発行していた『儒学文化』と『東洋思想』を統合する形で、本誌『研究　東洋』が創刊された。爾来、専門知と実践知を共に追求する伝統を継承して号を重ね、様々な課題に直面しながらも前進を続けた結果、今号で十冊目となったわけである。

創刊時と比べると、この第十号では、東洋思想にかかわる専門知の領域が儒学のみならず仏教やイスラームにまで広がり、実践知の対象も地球文明、ビジネス、経済システム、環境教育など多岐にわたっている。こうなったのは、研究所の体制が拡充され、儒学、仏教、イスラーム、西洋哲学の四部門体制になったことも影響している。

以上のごとく、本誌は研究所の紀要ではあるが、学術的な専門性にこだわらず、多種多様な論考を集成して今日に至っている。年を追うごとに、いわば東洋思想に関する総合誌の性格を持ってきたように、私には見える。誰かが指示をして、そうなったのではない。自然と、そうなりつつあるのである。それは、儒学や仏教で重視される「中」の考え方が反映しているのかもしれない。

「中」を尊ぶ思想は、「中道」「中庸」「節度」といった徳目を掲げる。東洋の聖者に限らず、西洋でも古代ギリシャのアリストテレスなどが「中庸」を唱えている。古今東西の英知が「中」の生き方を讃えている。

では、「中」とは何か。両極端の真ん中を行くことか。それともバランスを取ることか。結果的には、そうなる

場合が多い。だが、それが思想の本質ではなかろう。「中」とは「偏らない」ことである。つまり、全体性、総合性に立つことである。全体観、総合的立場に立ち、とらわれなく、物事を自由自在に判断する。これが「中」の思想的本質である。

したがって、本来の「中」は、抑制的というよりむしろ活動的なものだと思う。常に全体観に立って総合的に物事を捉え、偏るべきときには徹底して偏り、バランスを取るべきときにはしっかりバランスを取る。要するに、すべてを生かすダイナミックな智慧の実践となるに違いない。「中」とは「いかなる理念よりも人間の智慧を優先する」という意味での人間主義であるとも言える。本学が掲げる「人間力」の育成は、こうした人間主義に根ざすものであり、まさに中道、中庸の力を養うことを目的としている。

全体的で総合的な視野から生まれる自由自在な智慧、これこそが真に「中」を生きる秘訣であろう。全体性や総合性を身につけるには、有為転変の日常に埋没することなく、深い世界観を持つ必要がある。古典と呼ばれる書物には、確かな世界観がある。人生の全体というものを、我々に教えてくれる。

ただし、古典はじっくりと読み味わなければならない。世は相変わらず、その場しのぎの処世術の知識で溢れかえっている。孔子の『論語』やブッダの『スッパニパータ』でさえ、いまや日常の危機をうまく切り抜ける方策として語り合われている。人生のごく一部のために、優れた古典が切り売りされる時代なのである。

本誌『研究　東洋』が、そうした時代の風潮に流されず、また狭い専門性に閉じこもることもなく、人生それ自体について考える一つの機会を読者に提供できるならば、当研究所として望外の喜びである。

令和二年二月

東日本国際大学
東洋思想研究所所長
松　岡　幹　夫